

編集後記

暖冬との長期予報は早々と覆され、今冬の日本列島は例年になく、どころではなく、記録尽の寒波、豪雪に見舞われている。地方によっては4メートル以上の積雪となり、1階部分が完全に雪に覆われてしまった集落も少なくない。雪下ろし作業中の屋根からの転落や、落雪に埋まってしまうなどにより100人以上の尊い人命も失われている。その多くは山間部に住むお年寄りであり、生活弱者が犠牲になってしまう過疎化の現実は悲しいが、「相手が自然だから・・・」には、あきらめと同時に人々のしぶとさを感じる。

雪崩の危険があるため道路が封鎖され、孤立状態にある集落の主婦の言葉、「米や野菜など食料の蓄えはある程度あるが、灯油がいつなくなるか不安」。決して囲炉裏や薪ストーブで暖をとっているのではなく、石油ストーブがメインの暖房器具となっている現実がある。政府の「寒波・雪害対策本部」は石油元売り各社に対し、豪雪地帯向け灯油や除雪車用軽油など石油製品の安定確保を要請した。しかし荒天の為内航タンカーは使えず、タンクローリーの回転率も落ちていたため、元売り各社はJR貨物に緊急輸送を求めた。年末年始にかけてJR貨物は65本の石油列車を運行し、各地のオイルターミナルなどの備蓄基地に石油製品を輸送した。

自衛隊の災害派遣はとてもありがたかった。駆けつけてくれた多くのボランティアにも感謝している。役場の職員もよくやってくれる。そして、石油製品の輸送業務にあたったJR貨物の社員もきっと頼もしく思われているだろう。物流は縁の下の力持ちである。

春よ来い。早く来い。

(2006年2月 古井)